

弥生文化の上陸地だった摂津市域

今から 2200 年くらい前の紀元前 2・3 世紀から紀元後 3 世紀ごろの 500～600 年間は弥生文化の時代と呼ばれています。水稲耕作が広がったことが特徴です。水利や開墾などの共同作業の必要から、ムラが大きくなり、分業と富の蓄積も進み、身分の違いもできました。さらに、水争いや土地争いなどのため、各地で戦争が起こり始めました。村が併合されてクニになり、クニとクニの戦争で勝った方が大きくなるということが繰り返されていきました。



弥生時代水田の風景

(大阪府立弥生博物館模型)

『弥生文化・日本文化の源流をさぐる』より

水稲耕作・金属器と渡来人

水稲耕作は大陸からの渡来人によってもたらされました。渡来人は種モミを持ってきただけではありません。米作りに必要な一連の知識と技術を持ってきました。特に水稲耕作のためには水利や荒れ地の開発など高い知識と技術を必要とします。

青銅や鉄など金属の渡来と日本での精錬および利用も、時代を画する重要な意味を持っています。農具を製作したり、水利工事・新田開発などの土木工事のためには、鋭利な金属の刃が効果的な役目を果たしたのです。狩猟や戦争のための道具や、さらには祭祀の器具なども、金属は大きな変化をもたらしました。

また、朝鮮半島や中国大陸、北海道や沖縄方面などの遠隔地とも、人や物の交流が盛んに行われ

るようになりました。

弥生時代は大陸から大量の渡来人が入ってきて新しい知識や技術を伝え、日本のそれまでの生活や文化を大きく変えた時代です。

戦争で大きくなっていったクニ

戦争は、弥生時代から本格的に始まったといわれています。水田耕作と人口の拡大は水争いや土地争いを生みました。富を持つ支配者・権力者の出現は、蓄積された富をめぐる争いの背景となりました。

争いは権力者の支配地域を拡大させます。強いムラの支配者は近隣のムラを従えて、小さなクニを形成していきます。さらにクニとクニとの争いは次第に大きくなって強いクニを作っていきます。吉野ヶ里遺跡は戦いに備えて周りに濠を巡らし、敵を見張る櫓を持っていました。卑弥呼はいくつ

かのクニ連合の女王だったといわれています。弥生時代後期は、戦争で明け暮れた時代でもあるのです。

大阪平野と弥生文化

水稲耕作が日本に伝わったころ、今の大阪平野のあたりは極めて都合の良いことに、海水はすでに入らず、河川の氾濫がもたらした水稲耕作に適した豊かな泥土が広がっていました。

この時代の集落は河川が形成した自然堤防などの微高地上に位置します。そして自然堤防の後ろに形成される湿地を水田として利用していきます。畔によって大小に区切られた水田には、水路、水門、井堰などさまざまな施設が付属しその高度な土木技術がうかがえます。

このようにして大阪平野の周辺は、多くの人口を養うことのできる生産性の高い地域となり、東大阪市の鬼虎川遺跡、八尾市の亀井遺跡、摂津市に近接する茨木市の東奈良遺跡など大規模な拠点となる集落がつくられていきます。これらの集落は点ではなく線や面でつながり、さまざまな交流が行われていました。

注目される光蓮寺所蔵土器

庄屋一丁目の明和池遺跡など、摂津市内のあちこちから弥生土器片が出土しています。

中でも注目されるのが、昭和12年に鳥飼西700番地をヴルツウィスラー絹糸株式会社が掘削したときに発見された壺です。現在は光蓮寺が所蔵しているこの壺は、貯蔵用の壺ではなく乳児を葬った壺棺の可能性があり、全面に朱（棺に塗られる色）が塗られ、焼く前から胴に穴があけられていたからです。この壺はローリング痕（流されてできた傷）がなく、元からこの場所にあったものと思われる。淀川に接した鳥飼西のこの場所の近くに、弥生時代の集落があった可能性がうかがわれます。鳥状に並んでいたと考えられている自然堤防の上に住居を作り、周りの低湿地で稲作を、近くの淀川や河内湖で魚やシジミなどを獲って暮らしていたのでしょうか。



光蓮寺所蔵の弥生土器

全高 26 cm、最大胴幅 27 cm。土器の全面に朱を塗った痕跡があり、胴部中央部に穿孔（人為的にあけた孔）があります。畿内弥生式土器の編年によれば前期第1様式「中」に属します。『摂津市史』より

弥生文化の受け入れ口

この時代の摂津市域は、大阪湾と河内湖が接するあたりに近く、同時に、淀川の河口近くでもありました。ということは、大阪平野の弥生文化をまず最初に受け入れた上陸点に位置していたということになります。先の光蓮寺所蔵の壺は、弥生文化が淀川流域に広まる弥生時代前期に作られたもので、興味深いものがあります。このように、摂津市域は弥生文化の受け入れ口という重要な役割を果たしたと考えられています。

東奈良遺跡で青銅器製作

東奈良遺跡は、銅鐸を製造するための鋳型が出土した事で有名です。銅鐸の鋳型だけでなく、ガラス製の勾玉の鋳型も出土しています。

ここで銅鐸や勾玉が作られて各地に送られていたのです。青銅器製作には特殊な技術が必要であったため、数多い集落の中でも限られた集落で製作していたようです。

摂津市域の当時の人々は、この東奈良遺跡で青銅器生産にたずさわった人々の影響を強く受けていたことでしょう。

摂津市域でも安威川以南の淀川と稲作に関わる集落、以北の東奈良遺跡に関わる集落など弥生時代について大きな発見があるかも知れません。